



九編六卷之内

三

秋野
勝若院

南總里見八天傳第九輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第九十回 管領讒を容く良臣を疑ふ 御士義小仗々大敵を俟つ

却説元栗專作の當晩野兵を従へて五十子の城小なるまづ城の頭人根角谷中麗
 産の宿所へ赴き強人媼内船虫們が首をもて躬方の首級と梟替する夏の趣を報
 る折又那美田取蘭二も專作が反命を心のとると思ひ谷中二が宿所來り更
 爾るまを等て在り當下專作の件の兩個上職們の情語を御小御示され柴
 濱の奇談の車職堅定とゆひゆその夏甚分明を扇魔の灵験疑ふに因り
 那媼内と船虫が枯首と研りて高峻へて死んで躬方の斬首二十餘級を會卸し梟
 替て却那強人夫婦の背に記される罪惡を更ふ又牌の謄録して舊の牌と建替る意

八天傳九輯卷之三

秋野 勝若院

甲夜簡なれ人跡絶て誰れも知られず然りければ躬方の首級その數二十餘あるを
扛擔き人々非除敷兵們的搭駝するもその城内返入れり直止くるた所為然
とく其頭を棄措て鄙語の耳を塞ぎ鈴を竊む必とれ目正の石は附て選
争海沈め免れ傳首尾を必ゆら休まべと報るふ終つ谷中二の合笑か
領てそち十二分の造化の死明日より又魔の奇特をののく言らん約莫這
秘夏的美田生の方寸より輒くちも出される奇々妙計多かる中て縦作者の才子
でも戲子されが甲斐さうせん宛栗和ま出束り大義のいと勞の漫然専作
上の取蘭二のそ笑しは我を思ひの然りの多秘とまれ衆人を多く知り
呆らもあり諷るも多しその中の河鯉佐太郎孝嗣もそれのくも信じて嘆嘆堪
思ふ現小人の用心の巧みも及拙く智ある似るも倒愚之然り他が計る所主
君の恥辱と塗隠さんと神灵託し鬼責假も世の人欺り口は是小兒の戲れ

知る列御寇の言の志士の溝壑の端々憂ひ男共元之喪とて忠臣勇士の
戦利を敵首と捕り素より是恥あるを御躬方の敗北は咄住り冠を脱して
君の死命は代り比皆是忠義の毎既而て冠を脱し梟れる躬方の首級を妻
子の賜り忠死を誓て厚く葬らぬを敢ふれめ死業ありそ妻も御恩感て
慰ふも是をよする然る脚沙汰も侮人側我意は儘て首級を海へ放下
せしめ初め敵より慘く傍て後の戦ひ誰亦命を棄て君の先途運のあり
んや願ふ往日戦殺の毎その心術正して年来那侮人們と相對あるのそれ侮人
們の忠死も毫も憐む心なく日屬の恨を復せり只那強人夫婦の君罪惡
不思議を露れ這擾乱の折れも忽地梟首され侮人們の借て那天
罰を示されん神の威靈快佛の利益救世は是燒黍及不のとあるま
くそそれありぬ最高之嗚呼那不良の毎更を鬼神借るめくその做ま

所の隠憑ひそかにたもとを實四訓まことしよんあつんと思おもひ君の憂うれひを患うれふもの。是等これらのよき事ことをばて惶おそむ
 政の正ただきんを願ねがふとも又那君あのきみは中なられんとを怖おそれ黙もく止どますべし。況いはぬ我の年青
 且その職あつかまわれば思おもひのそと樹きもろ。薄情うすじやうるける人ひともろ。現戰世いまのいくさの習俗しよふく然しかと啣
 語ことかきくち不な娯ごて獨曾ひとりを苦くるしめけ。あは是後このちのちの語ことの介ま介ま程ほどは五十子の城内
 士卒しそく漸聚しんくわい來きて數百名ひゃくにやう及びおよび戰粟いくさの敵かたの與ともふ都みやこて施せ引ひれ。有司あうし
 們らこれ困こま果はて民の敵かたも受うけ外と外と合あ復ふさんと思おもへども然しかして那大塚信
 乃のが庫くらの白壁しろかべに寫かし。諭書ごんごの上うへの旨しよの違ちがへ亦復城またふくじやうを屠ころす。あやあんと鬼胎おにたいと
 抱かかりて忍しのみ岡おかを主君ぬしきみの守まもり。近ちか近ちか保たもたぬ城主じやうしゆを報うて。戦粟いくさと求めけ。是
 も先まの大石兵衛尉おおいしひやうゑい憲重けんじゆ大塚おほつかを城じやうの士卒しそくの五十子の城じやうの火ひを兵へい級くわいとら思おもひ
 もうけ。その折せ過と煙けむりと瞻しやん。城下じやうげの民たみの失火しつぱを猜さしし。由断ゆだんして姑且なほ時ときを待まちせ
 大勢おほしやう煽あほり。例れいの下した。消防しやうぼうの士卒しそく五六十名ごじゆにやうと遣つかひ。その途みち也。仁田山晋

五ごの伴當ばんたうの逃にて來きぬ。憶おくひる遭あひ。越こ初はつて五十子の火災くわいの敵かたは火攻くわく中ちゆう
 薛せき子し之の處ところに起おこり。龍山りゆうざん縁連えんれんの犬阪いぬさか毛野もうの流智りゆうちとら勇士ゆうし小敷こしきれ定正じやうじやう主ぬしの
 煉馬れんばの殘黨ざんたう犬山いぬやま道節だうせつの攻こう敷しきれて戦いくさひ難がた及および。獨ひとり仁田山晋にだんしん五ごの逃にた
 は放はな敷しきれ。彼かの美み具ぐも。那な里らの凶妻きゆうさいを大石おおいしの士卒しそくの駭おそく。大おほく形
 ら。あつん。這こ小勢せうを。今いまあつ。那な處ところへ赴おもむく。石いしを抱かかりて淵ふちの益えきを。新あらたを駄うまを火ひの近ちかく
 よ。る不危ふき死し所ところ為なる。皆みな共とも侶りよの縁えん由ゆと訴うて。又また左ひだりも右みぎも。大おほく大家だいか陣ぢんを
 旋まりて大塚おほつかか。件けんの報うけ。憲重けんじゆ憲儀けんぎの城じやう内うちの士卒しそく驚おどき。大おほく大家だいか陣ぢんを
 多おほく加勢かぜいと五十子いそしへ。相あひ罵ののしりて出陣しゆぢんの准備じゆんびと做なし。程ほどは仁田山晋にだんしん五ごの伴當ばんたうれ
 痛いたく肩かたを後あとれ。の五十子の城じやう兵へいの當あたり。由縁ゆえんある。漸しだく小脱せうだつ來きて定正じやうじやう主ぬしを
 恙あやまる。刃心やぶこころの城じやうを投なりて走はしる。の趣おもむき。及および五十子の城じやうの敵かたの大將だيشやう大塚おほつか信しん乃のみ成なり考かう
 と喚よび做なし。猛もう者しやうを攻陷こうけんされて。過と羊やう灰かい燼しん。信しん乃のみ一ひと霎しやく時ときも留とどま。倉廩くらうを戰

粟と飽を民小分令とて。道節毛野門の隊兵と二隊ありて。往方と知る退折の
高畷を仁田山晋五と誅戮せしめ。餘城方の首干餘級と皆濱表へ梟れしもの
更詳にせしめ。その後又來りしものが鮮目前の自殺の河鯉守如親子のまを。這那言
く報しる。憲重を色と失ひて。御前那里の遠烟と。民の失火と思ひ做し。加勢遲滞及び
あそか。あそくも不覚なれ五十子の敵退くも。那里へ成る士卒も。後の薛子料りか。さそく
城番の隊兵と遣へし。と下知る程。又五十子より來りしものあり。五十子の城内に殘兵既
立ちし。俱し四門を成る。二三百名ありし。信れしもの。亦更後れ。と面目する
けり。この故。憲重の病着あり。と偽唱へて。日と経ぬ。まて出仕せ。次の自忍岡へ使者と
定正の恙るを祝し。且鮮目前の悼を演て。悄悄地。定正の左右侍臣們。東西を餽り
幫助と求め。今今。異をゆり。然今。戰粟の催促と。倒れ。飲ひて。往日の。行心と。補ふ
よ。さるれば。と。求め。れる。數よりも。多く。戰粟と。運送し。七。五十子の。城へ。入れ。けり。然。然。と。這

回の怠慢の獨憲重のまを。石濱赤塚の城也。も。藻塩火を。めと。相錯て。援兵を
出さず。と。後悔の折。五十子より。戰粟の。徴あり。と。異議。不及。と。齋。と。その。備。元。て
けり。是。ふ。より。谷中。二。門。の。末。の。工匠。と。多く。聚。合。て。城。の。修。復。と。急。が。る。城。隸。の。民。毎。が
敵。より。米。錢。と。受。え。る。と。多。酢。く。思。ひ。飽。ま。ま。課。役。を。被。り。責。使。ふ。と。苛。刻。ま
更。臨。時。の。租。税。と。命。と。令。債。る。も。亦。多。り。の。故。小。莊。客。們。の。多く。信。乃。が。仁。心。を
追。慕。し。ま。す。と。の。め。る。谷。中。二。が。刻。薄。を。最。恨。く。思。へ。も。却。あ。る。べ。し。あ。る。べ。し。夜。ま
く。日。と。多。く。驅。使。れ。て。修。復。の。役。を。果。し。けり。介。程。は。定。正。の。二。月。下。旬。忍。岡。より。五十子。歸
城。と。谷。中。二。取。蘭。二。の。次。々。も。有。司。の。功。と。賞。め。祿。と。増。て。逃。る。もの。を。賤。し。ま。し。又
犬。山。道。節。們。が。隱。宅。と。知。る。もの。あり。悄悄。地。訴。せ。し。も。百。貫。文。の。賞。錢。を。楨。り。那
這。狗。示。せ。が。も。信。乃。が。徳。と。賞。め。る。民。の。多く。官。府。を。假。り。て。已。が。利。を。欲。する。殘。忍
を。頼。の。破。落。戸。も。道。節。們。が。在。る。地方。と。実。不。知。る。より。さ。る。けん。久。く。さ。る。ま。で。云。と。告

許さるるもの有りける。倭て又定正の河鯉佐太郎孝嗣が功を思ひ才不愛て親の喪居
 ることを許さざれば幾日もあると召出して近習の倭と使れる。孝嗣も亦恩と感して日
 夜の勤勞數ふべき。最正首の仕へて初縁連と同意んける。奸黨の飲茶縁連の
 敷られた他が親守如が鮮目前と誘導して大阪毛野のをも借りしうと公那密計を
 知りての快を思ひ謀謀令言と設けて折る觸る孝嗣と詭言するの言
 ろしと定正の流して一重妻時の推念せりし。詭譎既小度累りし。那衆口の金を
 鏢し市子三虎を致れし。唐山人の壁言諭漏れ定正竟疑ひて孝嗣と思ひ
 ありあり程の外様へ退けて罷辱を地易る。孝嗣も亦その意と猜して恐れ
 病病の假托して久く仕せりし。奸黨のゆるりと官主と詭譎を詭奸已とせり
 けり。この故に定正孝嗣が罪の虚実を有司命して召問せし。思ひのうらむ比危窮を
 救ひ軍功あり。今證據も虚罪と糾して情を沙汰せし。思ひも難し。

御宗大山道節が前响を腫る天窓の愈が是より頭痛屢發りて堪へ死日の
 ヨリつれれ。その療親不構つらひて。孝嗣が舌の虚実を糾す。追進するけり。休題再説道
 節即信乃莊介小文吾現大角大阪毛野を伴ひて有種并の數十個の隊兵と共に流し
 従ひ船漕して二十二日の曉天を千住河より來りし。感馬頭より陸より穂北を投て
 急送なり。然り又落船有種が岳に降りけり。水垣越三夏幼の御宗猛可ま有種が土兵を
 驅催して道節が大義の帮助。船と柴浦へ寄り折る夏の趣を告げ倭倭を死よりのけり
 けり。只山崖略し倭々と其死て出でた。心のき思ひの推禁んはさかち重戸と俱其頭の
 船より乗て漕し。かき乗る。越す。初と道節が勝軍の喜の顛末大阪毛野が復讐言ひ
 送遣し。却勝軍を賀びの酒肉を惜み地。準備七道節們をも程。七武士も有種們を四

更の左側より来るれば夏初車戸と俱に客房を迎入れて勝利の勢を演るの更陣
 だれが意吏も盡き昆布搗栗打鮑と餽之不世薦めるは折毛野莊介小文吾の夏
 初と車戸も初對面の口状あり詩々いられ累だて寫ま幾十個の隊兵們的船を飽ま
 東西賜りぬ明日見夫ふふれと心より辭して退りけり左右を程五更の鐘過りて
 家鶏も數鳴比るる各々疲勞をたぬれば信乃道節の現八角們と共侶不世と辭し
 席を去りて毛野莊介小文吾案内を儲の臥房に入り枕を就まけり却説るる次の
 朝毎よりも遅くはる且飯も果比まの翁夏初は有種と共侶の七武士の不安を尋て昨
 日の戦ひその圖不當と武畧勇戦の光景を有種が所りて連の稱賛をうりて道
 節の推禁めそその賞美は分過なる約莫這回の復讐言の落點生の幫助ありて
 尋く隊兵を召ればも諸兄弟と共侶の粉骨を盡し恨も所定正を敷漏しりければ
 敵を研るに數百名躬方一個も戦歿するも亦公翁の洪福也我々が幸ひ那刀丸兒

八名の窮窮はあまきとゆえかも醫療茶類を添へて心慮獨てあひながり只那八人のさき
 今番の大義を資する軍功の人々の幸出物甘味はけれも久く浮浪の身おれれば
 あら小儘一々かり因て大塚們と商量ありて準備の金二稔を合出扇かうち載
 され是軍用の與小年来腰おあるとヨク路費お做したる餘の御高里見殿より賜り
 金あるも今番義兄弟六名お配分せん徳れ我貯禄の只這微小の外お薄義を嫌ひ
 あれ去り那人々贈をせるといひ渡しとて夏初は果推戻とそい又思ひけるは人衆知
 られまうりて扇谷の管領は有種と與も亦先君の冤家又那嘉吉の兵乱も在下亦舊
 怨ありされも我身の老體は女婿有種と單身を車と碎く東海公の幫封を求る才をけれ
 復讐言の大望の企及いかうとの思ひ絶てゆひも料も諸英雄の驥尾お附る今番の大義
 素より人の與るは且我下る莊客們的皆是豊嶋の舊卒も那田横が五百個の從類
 こそ及ぎぬ今番の役を相懼びて皆舊死と雪んと度幾る兵を賜るともいふて



重賞を受へば。恩賞の趣は在下異日。示さるる義を許さるる。と推辞め。又有種も道
 節より対して。目今家箱の意せざ。最憚る言ま。諸君子の一所不住の客遊。之を
 路費は餘財ありとも。人小施志折はあま。道の即安果は道理の宜定。然るこ
 人各志あり。贈りてこれを受けられ。川も棄ん。湖も沈め。功ありの。賞せ。何ぞと復人を
 使ん。古の義士。勇夫の。加頭。断金の交りあり。今客遊の折。と。路費の。少。と。論
 聲の憶も高。る。ま。焦燥。を。信乃。大角。の。傍。より。推禁。め。夏。仍。有。種。小。対
 我。們。も。亦。大。山。と。同。意。する。と。勿。論。願。は。枉。て。受。め。推。辞。む。要。さ。る。と。論。せ。現。小。文
 吾。も。毛。野。莊。介。も。共。侶。小。詞。を。加。て。果。る。義。俠。小。服。も。夏。仍。有。種。且。感。且。謝。と。あ。る
 ん。力。及。也。他。們。は。侍。ひ。ん。と。心。て。金。を。受。ま。り。登。時。信。乃。と。道。節。即。入。夏。仍。有。種。對。して。我。們
 這。里。は。還。留。せ。ば。告。訴。ま。る。あ。ら。と。も。五。十。子。程。遠。く。も。れ。よ。り。も。不。近。く。忍。辱。敵
 城。を。竟。不。那。里。に。せ。ま。せん。先。度。の。恥。を。雪。ん。と。大。軍。推。寄。來。る。と。あ。ら。何。ぞ。と。防。ぐ。を。死

も我々の覚期の。之。怕。れ。り。あ。ね。も。公。拜。一。家。と。連。係。も。三。十。餘。年。の。経。營。と。空。ま。る
 ん。惜。々。と。任。れ。我。們。七。名。の。争。結。城。に。赴。じ。四。月。の。好。事。と。せ。ん。と。欲。は。る。故。の。箇。様
 箇。様。任。々。の。あ。ら。と。て。大。法。師。の。甲。斐。を。立。去。り。獨。結。城。に。赴。じ。里。見。殿。の。現。與。先。亡
 嘉。吉。の。諸。靈。魂。を。吊。ん。と。の。れ。よ。り。と。詳。し。解。示。し。七。傳。約。束。あ。ら。ま。れ。我。們。の。那。地
 也。て。大。法。師。の。旅。院。と。尋。ね。結。城。の。城。下。の。歇。店。を。求。め。て。法。會。の。折。を。あ。ら。と。公。拜。を
 連。係。ま。る。我。們。の。後。安。ら。へ。因。て。別。を。生。か。ま。る。西。三。日。の。旅。ま。る。今。よ。り。首。途。ま。れ
 と。の。を。夏。仍。有。種。と。も。亦。餘。義。を。あ。ら。と。結。城。氏。朝。を。城。氏。方。を。津。宮。の。山。内。管。領
 定。の。方。人。へ。然。へ。結。城。に。在。る。と。も。後。難。あ。ら。と。決。め。り。我。們。の。他。人。を。難。を。用。業。の
 始。より。皆。腹。心。の。の。れ。こ。こ。這。里。は。潜。び。て。ま。る。と。も。決。て。敵。の。聞。か。る。と。も。縦。外。の。洩
 せ。て。大。軍。推。寄。來。る。折。諸。君。子。這。里。に。在。る。と。も。我。們。必。免。る。が。願。は。四。月。の。時
 候。も。長。閑。の。杖。を。駐。り。あ。ら。と。數。ま。る。と。も。在。下。の。結。城。の。殘。黨。之。諸。君。子。と。共。侶。の

いそ那地へ赴きて件好事の會き欲するごとく詩文其有種も亦詞を盡す俱不禁
めて已まじしと莊介も俱ち聞き信乃道節まらち對ひて喃大山主大塚主の翁の意見の
り。我々ここにありて後大敵推寄來ばそ身も脱む禍を人小賄不度くも義を
理あり我々這里を退けて後大敵推寄來ばそ身も脱む禍を人小賄不度くも義を
又てせざる勇るは權且這里より日と夜と敵の動靜を視て推寄來む所の折に結城
もくとも遅くはべらざる。那談の任の事と詞餘は解論せば現大角毛野小文吾も是
然之と領けり是より信乃道節の事を衆議の從て敵を等て防戦し古々の計謀不
及び主人夏仍有種に勉む諸大士の策を聞き當下信乃道節の事。這莊院の垣地
中敵を防ぐ妙なるも前一條の小川あり後都水思且左右の路陝ければ勢
もとも推並そ稠入るとい克む。前種と云々準備して思ひの隨に射て仕進退の又
時宜まよ下豫躬方の莊客の謀合と支あえ折皆自焼して這莊院は盾籠るそ
よめれといふ莊介も領を説宣來緊要するん異日寄隊の大將の持資親子を除く

外本事の昨日より知ぬ中一にて投げ方退くとも易く。道即眼を瞪らして退くとあ
持資親子が出て來願ふ所の敵も百騎が一騎もあらず。然る宜し。大山主我々未生より里
も舊に怨みありと敦園猛く論ぎ大角徐あえりて然る宜し。大山主我々未生より里
目殿小宿因ありと徴小応する身も。それ忘れて飲又。那大敵を撃んとて身の危を思
ひ。匹夫の勇と云ふものと論せ。現八小文吾も大角が説を是と稱へて又云と論ぎ。毛
野のやうな合はて諸兄弟の討論の皆その趣ありといへも。敵の推寄來ぬ不意の機を
知まじし我進退を論ぎ抑亦早く。今愚意をて料ら忍心岡と五十子。同謀見を遣
て敵の動靜を知らば便宜と云ふこと。今愚意をて料ら忍心岡と五十子。同謀見を遣
ら。明日より同謀見を毎日那里遣まされといふを夏約ちゆて。在下と有種あり任
件の三所へ遣まらせ智介小才二も。他們は孰もその命を命ぎうのや。同謀見を遣
角の憶まらち。現那二人の世才あり。必行ある。其の大家再議及び。商議既決りけり。

あつた。せうすけ。こまの。ふんまき。さやあ。ふむか。やまの。かき。こあ。
あつて。夏。の。世。智。介。と。小。太。二。件。の。機。密。を。耳。に。示。し。鯽。魚。鯽。魚。野。菜。を。と。擔。賣。の。小。經。
紀。見。子。件。の。二。僕。を。打。扮。し。て。是。より。日。毎。五。十。子。と。忍。岡。遣。り。城。の。動。静。を。撈。り。せ。り。是。より。
那。根。角。谷。中。二。と。美。田。馭。蘭。二。計。ひ。て。躬。方。の。首。級。の。鼻。替。媪。内。船。虫。を。鼻。首。と。す。又。
管。領。定。正。の。忍。岡。の。城。に。在。り。道。郎。射。れ。る。箭。响。の。故。り。折。々。頭。痛。堪。え。ず。致。置。療。不。自。
屬。と。過。ま。り。又。道。郎。信。乃。毛。野。們。在。在。を。索。ね。よ。と。那。這。下。知。せ。れ。り。又。五。十。子。の。城。修。復。の。
漸。々。の。事。を。七。大。士。們。冷。笑。ひ。て。あ。ら。ん。速。攻。取。り。勢。ひ。あ。ら。ん。も。倘。我。們。が。旅。
亭。と。人。知。れ。る。後。の。変。及。料。り。か。ら。の。口。小。心。ま。と。と。遠。く。謀。り。深。く。潜。り。徐。に。光。陰。の。過。
る。も。等。け。り。介。程。の。御。向。道。郎。信。乃。毛。従。ひ。て。俱。に。舊。怨。を。雪。ゆ。る。這。穗。北。の。莊。客。們。今。番。
道。郎。が。令。ま。る。二。百。金。を。配。分。せ。れ。て。義。の。與。財。を。惜。ま。豪。傑。の。心。操。を。又。今。ら。う。感。
激。さ。る。不。傷。疾。る。兵。毎。別。又。有。種。心。屬。る。よ。わ。て。費。用。の。置。か。れ。り。且。然。り。且。
勇。ま。て。天。晴。大。敵。も。來。り。又。花。々。に。戦。ひ。て。洪。恩。高。義。を。報。め。と。各。鐵。と。磨。石。を。枕。と。

あつて。齊。一。敵。を。等。り。程。の。件。の。八。個。の。金。齋。兒。們。の。刀。瘡。を。ら。り。瘡。の。初。他。們。が。瘡。類。の。御。
一。個。の。醫。師。が。他。郷。に。徵。る。と。せ。ら。れ。り。道。郎。復。讐。の。從。卒。の。這。地。方。より。出。る。を。知。る。
の。絶。て。る。も。り。後。り。一。程。の。春。の。と。花。開。馨。香。を。三。月。の。折。々。五。十。子。の。風。聲。亦。復。せ。て。
定。正。主。の。日。忍。岡。の。城。中。北。條。氏。と。和。談。破。れ。山。内。管。領。家。頭。定。主。と。合。體。せ。れ。て。
長。尾。景。春。の。和。順。せ。り。され。毎。人。多。く。持。資。親。子。を。拒。し。票。と。す。計。畧。を。用。る。と。す。
あ。の。故。の。持。資。の。病。着。あり。と。せ。ら。れ。り。今。も。不。相。摸。る。糟。合。の。館。に。屏。居。し。て。稍。久。く。在。
せ。り。又。那。河。鯉。孝。嗣。の。諺。者。の。舌。の。劍。を。怕。れ。て。亦。病。病。假。托。け。て。忍。岡。の。城。に。在。り。
心。の。一。致。を。城。内。日。毎。の。夜。更。に。大。山。主。們。を。穿。鑿。せ。り。嗚。呼。の。聲。を。聞。か。ず。と。す。
た。り。信。れ。後。安。泰。と。小。才。が。報。し。七。大。士。商。議。せ。り。大。大。德。の。石。木。を。去。り。結。城。と。て。赴。け。
ま。る。も。傳。れ。既。に。之。越。六。十。餘。日。麻。生。り。本。の。月。の。法。會。を。我。們。那。地。に。赴。て。對。面。せ。り。
勿。論。も。那。大。敵。の。故。一。番。の。音。耗。を。實。に。結。城。に。在。り。推。量。の。三。更。の。心。を。言。

悄々地小人を遣して安否を問ふてよめられし。意裏に夏仍の生で相譚ひて夏仍夢て
 異議の及ぶを忍固へ間謀見を遣す要する。脚力世智介を去るに真実を
 却世智介の信々と夏仍のあつて七次の日結城へ起し遣る。七次士們の第一要時世
 潜へ一封の書翰の故意感質を只口状を世智介の言示せの。他事も。信而六日を
 歴る程世智介結城よりなり。因て夏仍有種と共侶の士の身邊を赴きて那地の勤
 静を報る。小可結城到着せ日。寺院の客店毎に甲斐の石木より来る。大法
 師の在る。飲と。隈も。尋問ひ。又。知る。一人。中。一個の老人の誨。這里
 十町。西。嘉。古。戰場。林。原。の。近。曾。何。処。より。来。あ。ひ。ん。一。個。の。行。僧。の。其。頭。の。草。の
 蒼。と。締。て。獨。念。佛。と。在。る。と。他。多。く。快。快。と。尋。ね。え。と。れ。れ。る。跡。て。件。の。林。原。に。赴。て
 樹。間。立。潜。に。那。這。と。相。れ。果。と。老。樹。の。下。に。最。も。寂。る。草。菴。の。竹。の。柱。萱。の。簀。已。時。れ。れ。も
 造。り。毛。飾。の。毛。延。才。の。六。枚。と。布。袋。正。面。高。座。の。阿。弥。陀。如。來。の。画。幅。と。拭。て。内。に。一。個。の。法

師あり香深の麻の法衣小皂は紗綾の袈裟と拭て本尊小朝ひし。連の小木魚を
 鳴して念佛を在せし。是るべと猜し。のりまさんと喚ぶ。数回及び。んも
 甚。心。も。せ。れ。れ。登。時。小。可。思。ふ。勤。行。の。最。中。也。応。對。便。さ。故。る。べ。夏。果。る。ま。で。信
 志。と。尋。思。し。日。の。暮。る。ま。で。獨。鴉。立。て。し。れ。れ。も。念。佛。の。聲。間。断。る。ま。で。何。時。を。涯。と。知
 る。れ。れ。れ。休。難。て。又。我。回。然。の。ま。ま。と。喚。ひ。る。巷。主。の。龍。耳。見。る。け。快。く。と。い。ふ。知。る。不
 似。れ。れ。城。下。小。な。り。歇。店。と。求。め。天。明。し。て。次。の。日。風。り。て。立。去。り。又。那。菴。小。菴。主。の。勤
 行。の。如。く。喚。べ。と。よ。め。ら。れ。る。那。里。茂。林。深。く。て。耳。小。く。衆。鳥。の。聲。眼。小。見。る。狐。鬼。の
 足。跡。霏。々。と。と。零。る。花。稀。老。寂。莫。と。と。詰。る。人。を。あ。の。日。も。獨。立。消。せ。小。菴。主。の。背。を。さ。る
 の。相。貌。年。齡。の。如。く。登。り。て。面。貌。を。差。圖。ん。の。ま。ま。と。履。と。隔。て。癪。を。搔。く。心。地。せ
 ら。れ。て。甲。斐。を。け。れ。と。送。り。脚。力。小。立。ら。れ。る。と。人。と。も。知。る。と。て。還。る。本。意
 る。所。限。り。の。備。那。菴。主。の。尋。ひ。ま。る。大。法。師。で。ま。い。ゆ。外。も。刀。袷。の。使。れ。を

知りせんと尋思し又吸掛使来り大七隻より大よとらひんごも甲斐の庵
 主の終日飲ぶ吸掛念佛の三日消しを共侶断食と凡夫の堪んやのるれば
 ひ絶て昨夜の歌店なる臥る更尋思せし左も右も甲斐を這里の旅宿を
 累ふより快立かたの趣を方衿の小報まわして後の指揮小儘せんと思ひ
 歌店と立路次をたて剛才帰着侍りぬと一五十の長談をちづく夏仍有種
 沈吟する當下信乃の那這と自餘の犬士うち對ひ各々何と思ひぬ世智
 相るとぞびざりしと浮世の外小締る草の葎の故ぬを、大大徳るんと思
 と問ひ其介及小文吾道節も俱小點頭て然心せられぬを疑ひぬ飲を大七
 そとら知せし名中世智介連出来しと譽れ現八ち合笑て伴の菴主と喚
 忘しせられぬの壁返まで大村主と我訪ひ相似し是就ても離衣の刀自
 とら後方とせられ大角憶も嘆息して世在俗の老翁老涙を朝々暮々小家
 廟朝

ひて初て看経者身折す電の其新の燃退去の鐘の飯の焦んとせし或は
 喋る炊妾と罵るも聞かれぬ或は猫児の鮮介と偷る或は慈鳥の柿昔を破る
 着て慌しく人を喚ぶ念佛者流は比自是なり我一念と擲て心の弥陀を求
 せん心と真俗二道不掛ても口念佛名と唱まれば必利益ありと思ひ皆思
 るふあふねども、大大徳の先亡の菩提の與石木と去て既結城小到りて
 外尋縦庵小訪入ありて終日喚て驚きとも心視聽の聞かぬ絶て恋るる
 黙るんのも尊一とと口管稱賛ありて大家有理と疑ひ解けて毛野も
 けり姑且と信乃がの事大徳の逆示をあり法會の往るま吉元年辛酉の夏
 日結城落城の思辰ある三月も既小盡るとまらぬ法會の本日前四日我
 死て伴の庵主と相定めぬ不便ありと後悔ありといふ大家點頭てを議
 月十二三の時候は皆共侶小首途せんともその日を遅しとせり程は主人
 残す夏仍有種

まくほと情願推辞くはれ信乃們の既ふそのを許と一路八名と定め夏約
 斜るまど軟びて逆旅の準備とあらけり。左右も程の春の過て夏の肇なる隨
 苗頃へも門田の畔に楊楡花を推乃り。早晚延る自然諸の甚より長谷の涯り
 朝のよと忘れても族々の杜鵑青山遠く鳴耳。肆月初の九日七武士們の明日未
 明小齊一當處を起去りてを結城へ赴んとも夏約も信乃と告て準備とせせよの
 日下晡の左側より夏約暴病發りてのめりり脚も動まざる瘧ま中風也才
 氣息の暢ふもち臥る依令事も知て將水も吐下り重戸の警驚らち歎け枕
 方小佐り後方侍り介抱暇もあらず有種も是が醫師を招に驗者と請之周
 公を哺と吐く小似れ一家見多奴婢までも甲乙とる奔走まよの夜睡るもの七六
 士們下りて夜俱本驚憂るもの信乃折る捨て出てもんはさるて迭伏病牀小
 赴て同慰め心もき又日過て肆月十三日あり然信乃道即們的焦燥て自餘の

大士と商量する中。時得てを失ひ易り。主人の病着小拘らして今來の法會赴
 る後悔其首不達ぐ之七小別を告て明日必出去らんも却有種を招と告て信乃道
 節がひける中。大法師の法會の。まお翁の望儘と同伴の約束ありとも争何せん天
 不測の風雨あり人小不豫の病患あり翁の病瘵一朝瘵りあつるあつる今内小病捨
 別を告る本意もねも。我們醫師あられ這里に在りても亦益る。明日未明より終
 まで連りお路次と急ぎ必那期不遇とかん。のを許容あれとられて有種困た
 頭と傾け沈吟して示教の趣至極も親が願ひ今番の同伴。その期及びて憶りなく病
 着小より果さるるぬも本意もいん在下親の名代小立まきり思へも。おそれ大病
 るるを。それまあら不儘せり。明日首途を志る。お伴當をまわせん馬まれ轎まれ乘ら
 せぬ。お小障りのいひ。現八大角。小文吾井介毛野と俱。月来止宿の欽。町寧の
 演別を告て目今。お意不横られる。伴當も願。か大塚大山も信乃。我們の身を

浮萍の旅より旅をなるとして東西南北せざる事。皆不自由不熟なるものを救ふ伴當あつた。
 及て路次の煩ひある。この傍放ち遣りたんとて。その倒れ幸ひあれと推辞は信乃と道行節と又有。
 種ならず對して諸兄弟の所是我們が真面目那外物と飾るに要す。扇谷の寄隊その。
 沙汰絶て後安んじられぬ。今番の特更微行へ這七人史事足れり。いづれ措かひと推。
 辞と有種強かぞ然る。今宵送別の盃とまらざるべく。大大徳布施物の一菓を寄せ。
 らぬの美事。許さぬと。大士們を不聴を好意を恃る。主の公病の病厄あり。
 何樂して受り。酒も亦益。且、大法師の石。
 永也。姑且縁の折るも一錢の外受ぬ。今番の法會。他の施主を仰ぐ。
 東西商り事も亦益。願ふ所の翁の醫曹茶肴病由漸く。孝養を盡し。
 有る優る功徳あり。と送代り語と續て。心も對の理。潔白又の。
 種に感涙の找む。覺ぞ沈吟し。をなす。意不後ひけ。まれば。

聊中酒の款待あり。重戸も奥より出て来て父夏は大病。法會詰語の情願を果さ。
 便さ。口云と繰返も。倭文の芝環繞一繞曲る。浮る。折られ。大士們的程なく。
 多。飲び。演。別を告る。肚裏。夏。俱。路。像。中風暴。
 俱の難義の旅宿。法會。後。折。切。の。幸。思。
 たり。既。七。果。有。種。侍。只。管。別。惜。け。信。而。詰。朝。有。種。七。大。士。を。
 御。盡。処。も。送。り。と。豫。思。ひ。け。天。も。夏。病。着。危。窮。及。び。身。邊。成。
 離。七。大。士。も。亦。機。猜。と。重。て。別。を。告。る。及。び。遠。く。出。て。世。智。介。
 と小才二喘々。趕々。来て路三十町送る。告別と還る折東あり。
 入りの昇立七個の大士們が結城の法會に赴いて。後の話説甚摩を分教あり。
 性趙州曾識相接。犬牙先獨突然。
 たでの花這詞詔の意と知。欲せ。下。の。回。より。後。々。を。解。分。る。と。聽。ね。か。

第九十七回 兇賊心をくく自積悪を訴ふ

話表安房上総二州の守見治部大輔源義實朝臣の往る長祿二年の秋伏姫富山の
自殺の折大なる奇瑞の且金碗大輔孝徳入道、大坊の當時八方へ飛去る那箇の
明玉の往方といふと索んと忽地行脚の錫を鳴りて飄然として辭去りし他安危も
心のくる然るも亦賢を招けしと徴ん與はと警崎十一郎照文をその投き方遣せし稍
久く信もる比よりして義実主の隱道の情願の諸臣の諫めを用ひぬ有る一日杉金
木曾介元堀内藏人貞ひと首とて有功の老母を送るる召聚合てみづら論一王
ふきつ津連日者我隱道と云ふ處をうらみと諫めたるその言理のありと云ふも争何せん御前
我一言の失より伏姫と八房の犬見の伴せて心不羞る言より哀れむ伏姫の着月田花の
国秀も賢才義勇の親恥く九男子魂あればと親の與ひ一言の信と切失のト

とく那畜生と伴侶とくと深山は光陰を弥りし幸ひも七身と汚されを思ひ
那孝徳が飛丸の與ひ八房と俱に命を損へるその折念珠の天験あり且伏姫が今
般子送せし言の棄棄虚かむもあつた那塞翁が馬も似て禍鬼及て我見孫の福早
るぬぐたつわ祥欣知ねども椿樗の八千歳とも祝一個の愛女と非命を死せし
るる妻五十子も子もあつた夜の鶴の腸断離れて同月日黄泉に赴け又照文が父蛇虫
崎照武の怒り姫と赴んとて身と谷川の水屑とるぬ是さ不便のありふ又金碗
大輔孝徳の不測の事と醸せし我も救ふとせむ敷いづべりける頭顱も換
頭髪も前髪も拂ひて不二法門に入せし遂に後身人となりて他が親八郎高吉が我を帮
助て甚高より功報余由るるあり給と云恰といひ皆義実が疎忽の失かくの如く
至れると何阿容々と世も立の後世議論定りて軍記野乘は寫すもあつた識者も丸を
弾れ恥を知むといわれぬんや汝達よりも義成が幾回とる悲しと請ふ隠道の

ぎを林示めかき用ひさうし信る故願ふは汝達明日よりして義成は侍と我は下見
如くその足さると補ひて臣る道を盡される四境いよくを異よして我身も後安んば下
あの美をさうろゆかといと丁寧は示しあべ氏元貞約以下の老黨言の道理は通ら
れて皆感涙の找む覚を忘難るそが中あ氏元を登り頭と拾げて謹て宣はさう御
誼うけをりなりぬ然まて思召る誰う違背仕らんしかそらく其門の結城没落より
せんん。このめあてまてこのふとくひの
先君の願命の後ひなり本洲へ御渡海の始よりして辱く塚宰の列は在りといへども
素より補佐の才学を君御隠遁すはまもる御曹司の義成をのち後見とすれ
るを願ひければのを義我実推林示めて否とそ議の益益入既あ浮世を厭ひ何
浮世の掛念せん家叔と我兒の譲りる義実をその日より世ある人と思ひはか我
る既を決せりる月具あ異日あ沙汰せん各々退りいへと。躬て奥ぞ入りある臣命返す
よもあ氏元並は貞約のいと本意を思へども然るあ死あされん卒とさうふ

衆人と齊一席と龍の間小土圭すあ己の時の頭連なる老毎が心ある物思ひ眉と顛
めて退せり。是より後幾日あて家叔譲りの規式あり安房の御曹司義成の
堀内藏人貞約を使者とて。隨便京都將軍家義成へよと告免許を以て安房
守小任せられ房総二州の圓司と時長禄三年己卯の秋八月伏姫の一周忌の義
実の遺世の宿志と果あひいその歎ひ大なるをその美を士民小御示さて瀧岡の城
内あ西のふ閑寂の別館と造りて其首小閑居の折るの突然居士と自稱と敢政
事とさうあ心苦提あ入るといへども。る不思召とやありけん祝髪得度あは是より
鳥髪あ優婆塞を伏姫並に孝吉門が菩提城をさく吊ひあ看経唱名の暇あ松
風並月を友とて或は死の花を嘯死又或は死の雪を眺めて情景あうるあ
詩を賦し又歌を詠ど樹爵を殿置し胸を裸ふとさういふとやあひけり夫突然あ物貌
既あ菩提あ入りるが。突然と一も號する出塵出離の出入と世は超然なる所以



八代将軍御前

十七

大徳堂藏



この処第二輯の伏姫
自投の明年長祿三年の事也

功臣を集
め
義實意見
と示す

赤の六郎

堀内貞約

杉倉元

市川半三

八代将軍御前

大徳堂藏

且突穴の從ひ大穴の從ふその天と穴のせり八房の犬富山に在り一日伏姫の徳化
 せられて菩提心を發し姫の死に相從ふ俱穴をゆるぎ又突字に分つたは
 是則穴の下八の犬ありふる家入覆屋是より二十餘年の後八犬士當家は聚合て
 八行としてその君と先帝を致す祥あり又然月日從ひ大穴從ひ火穴從ひ火字を入
 分つたは便是八人月日は明德を明ふるの義あり大士八人の明德を
 同くするの意の中稱ふ當時の美を知るのる後八犬士の來る及びて獨毛野
 のことを悟りてその妙契を感せしと作者又按て義實朝臣の卒去のりその
 歳月を誌せりゆの異同あり里見記及中村因香が房総志料の舊記を援て長亨
 三年と改元ありとま四月七日又一説の長禄三年八月二十二日といふ非なり
 ありの件の二説を並て借用するよりありて斟酌既右の如く同話除煩小程
 安房の里見第二世の王安房守義成朝臣の時尚弱冠されども文學武畧

父祖の劣らば民を極國と治めて南總の竹藩屏す是に加ふる杉倉堀内の二老臣
 あり又荒川兵庫助清澄東六郎辰相と喚做をのり素是里見の誼第
 義実の父季其の家臣之嘉吉元年夏四月結城落城折件の清澄辰相の義実の
 迹を草紙にて敵の冊を殺せり幸く命を免れられたる當時義実主従の去向を知り
 るより一々權且邊鄙に迹を埋めて本意を返せし不娯る程の義実更安房小與
 了て武徳八洲に隠れられたる清澄辰相怡悦の勝を俱に瀧田小推参りて宿志城
 許京去りて義実も亦執りて留めり虚実を試みり素より武功の猛者毎るれ
 命を毎る做してあり中心信も亦大なるねば嫡子義成を隸れり今番氏元貞
 仍と共に専政事小與りより世々當家の家宰らあつて杉倉堀内東荒
 川を世の里見の四家先と稱へり然山下麻呂時安西連が亡びてより上總の武
 士們皆采心義実の威風を靡れて征せされども執りて好を通し臣附としてその堂

握わつつとと所しよららるる。ままれればば邊へん境きやうをを折しやう々く野やま心こころののあありり。義ぎ成じやう箕み求もと衣いとと嗣つ々く及およびびててののううままくく徳とくとと恪とくめめ他たがが差さ差さるるとと考かうふふひひるる。上かみ總そうののあありり。下した總そうをを既すでにに半はん團だん服ふく從じゆうてて。地ちとと廣ひろむむとと其その三さんヨよリり。ああどどのの。當たう王わう安あん房ぼう守しゆ義ぎ成じやう朝てう臣しんのの安あん房ぼう郡ぐん稻いな村むらにに在ありり。城じやうをを房ぼう總そうのの賞しやう四し討たうをを受うけけ。又また前ぜん治ぢ部ぶ大だい輔ふ義ぎ実じつ老らう八はち平へい群ぐんのの瀧たに田でん小せう田でん居い。浮う世せののううままくくるるゆゆをを信しんじじのの程ほど一いつ年ねんとと歷れきてて。文ぶん明めい十じゆ年ねん秋あき七しち月げつ初しよ旬じゆん小せう幡ばん崎さき十じゆ郎らう照てう。文ぶんがが大だい江かう親しん兵へい衛ゑのの祖そ母ぼ妙めう真しんとと大だい田でん小せう文ぶん吾ごのの父ふ文ぶん五ご兵へい衛ゑとと伴ばんをを下した総そうのの市し河かとと慌あわいい。くくかかののああけけらら。稻いな村むらのの城じやうをを守まもりり。孝かう徳とく入にゅう道だう。大だい坊ぼうがが行ぎやう脚かく以い来らいのの信しんもも知しらられれ。又また那な仁に。義ぎ八はち行かうのの王わうのの往かう方ほうもも知しらられれ。ゆゆゝゝのの感かん得とくとと生なまむむるる。大だい塚づか信しん乃の成じやう孝かう大だい飼かう現げん八はち信しん道だう。大だい田でん小せう文ぶん吾ご悌てい順じゆん並ならびび大だい江かう親しん兵へい衛ゑ仁に大だい川かう額がく藏ざう。義ぎ任にんのの身みをを信しんじじのの疾しやくもも。且かつ大だい江かう親しん兵へい衛ゑがが父ふをを殺ころすす。山さん林りん房ぼう八はちをを襲おそふふ。洲しゆ崎さきをを坊ぼうとと相あ謀ぼうてて神かみ餘じゆ長ちやう。狭せま介けいのの家けのの賊ぞく臣しん山さん下げ定ぢやう包ほうとと狙そ撃げきゆゆんんとと謀ぼうてて長ちやう狭せま介けい光かう弘かうをを犯とがすす。杉すぎ木き朴はく平へいがが

孫まごるる。又また古こ那な屋や文ぶん五ご兵へい衛ゑのの那な折しやうをを坊ぼう三さん朴はく平へいとと血ち戦せんをを。竟つひにに朴はく平へいをを殺ころせせるる。那なののままちちをを。古こ七しち郎らうのの弟ていもも。又また房ぼう八はちとと義ぎ侠ぎやく勇ゆう敢かん祖そ父ふ朴はく平へいをを弥や倍ばいてて。大だい塚づか信しん乃の窮きゆう阨えきのの必かならず死しふふ代たひりり身みをを殺ころしし。仁にをを做せししるる善ぜん報ほうええけんけんのの子こ大だい八はち。月つきのの目めをを用もちぎぎららるる。学まなぶぶ。那な仁に字じのの五ご玉ぎよくをを握にぎ持ぢしし。件けんのの折しやうをを用もちぎぎららるる。奇き特とくありり。又また房ぼう八はち妻さい沼ぬま苗なほ小せう文ぶん吾ごのの妹いもうとをを横よこ死しののままにに。又また悪あく棍こん舵た九く郎らうがが妙めう真しん小せう懸けん想かうをを。其その情じやう慾よくをを果ぐわええんん。大だい八はちのの親しん兵へい衛ゑとと檢けん攪けんひひ石いしととてて。搏はく殺せつととせせ。折しやうをを神かみ火か。忽たち地ぢ雲うん中ちゆうのの件けんのの悪あく棍こん舵た九く郎らうとと援えん登とう。二に段だんにに列れつ衣いてて。地ぢ上じやうのの軀くをを投なげげ。且かつ大だい八はちのの親しん兵へい衛ゑをを神かみ隱いん小せう願げんとと依よりり。又また信しん乃の現げん八はち小せう文ぶん吾ごのの武ぶ藏ざうをを大だい塚づかのの郷かうにに赴す。大だい川かう額がく藏ざうのの事ことをを告つぐぐ。不ふ仁にん義ぎ八はち行かうのの文ぶん字じ自じ然ぜんにに顯けんれれるる。灵れい玉ぎよく感かん得とくのの壯さう士しのの外がいにに必かならず三さん名なああるるべべしし。八はち士し具ぐ足そくのの折しやうをを考かうてて。共とも侶りよのの微ゐをを心こころにに懸けんせせんんとと。辯べんにに大だい塚づかにに赴す。其その顛てん末まつ又また照てう文ぶんのの後ご難なんのの心こころをを考かうてて。妙めう真しん文ぶん五ご兵へい衛ゑのの相あ伴ばんをを

慌しく帰園あるも又那許我の御所成の家臣とぞぞ新織帆大夫が信乃と穿敷の
 面ありの疑しを尋ね足らざるを听果て只顧感心の外あるま姑且と宣ふは是等の密書の
 大殿義実の御世仰付られて賢慮の出るや我の聴措くは照文の妙真と
 文五兵衛と相具と瀧田殿義実へまうし我先騎馬の使と馳て先まて注進さる長
 途の疲労さるるを必るれも快然と仰ふ照文欣然と言兼と稟し退り出て然而文
 五兵衛と妙真と稲村殿の仰のうと箇様々と傳示して俱と瀧田赴死けり介程の義
 実朝臣稲村殿の使者の注進を听ゆる登崎照文が帰園の趣、大法師の恙もあらず
 料敷行脚も他支るるも並信乃現八小文吾親兵衛額藏五武士の事の顛末の餘文
 五兵衛妙真房八沼蘭們がうまても今番照文がまをせざる書冊の載ていとそそも
 晋呈しければ義実感悦流るる近習小讀し听果て照文を等々程の登崎十二郎照

文の文五兵衛妙真們と相具して瀧田の城に來着の日義実朝臣小見參り登時義実の
 先照文を召よせりその勤功を勞ひて那明玉のう大士們的の既の聞召れり幽冥の不可思
 議鬼神の出没有とまれば則有り毎とまれば則をいあどりく聖人の怪力乱神を語
 であつて況凡夫の臆断りて辨ふはあつねも那八顆の明玉の伏姫が仙より時役行
 者の冥助と蒙り不思議の念珠のあつた他が生涯身も放さず深信怠りるなり
 者その看敷の大玉の初は如足畜生發菩提心との八字あり後の變と仁義礼
 智忠信孝悌との八箇の文字の做見れり素より火物なる似たり然に那八房は犬の
 最期及びて菩提心を發せりと又那大塚大飼大田大江の毎哉名教各大を氏とて
 各那身もあつたその形牡丹の似るもの明玉を感得して出生時を同くするも又是奇
 中の大奇なりとそ大士信乃們と共なるは是八人ある元玉の因縁その人を以て舊還
 れる所以の歎遮莫伏姫が終焉の折忽然と光明を發ち散亡する玉の性方と求

人最做一かた所行るん宿望虚一かぎて玉と人とをゆるりも孝徳入道、
 大坊が道心年来堅固る一念竟小幽冥を通一ちあわえんぞん是併照文が勤
 功亦亦少く惜しむ相見る所の云大士と伴ふてかひまわらざりて尤ほ懐の至り
 然るも那大分大江親兵衛仁と申尚四歳の小見也神隱小遇ひと歿存亡心
 るにたれも他門の九人各感する所ありその宿因の故をて生出するものあり
 縦空窮厄ありとも又神佛の冥助よりて必恙あらず天縁熟する時至る件の八
 士具足しく當家股肱の臣とあるん然就て照文が俱して来る大田小文五の父文五兵
 衛木江親兵衛が祖母妙真の母も照文が具書不よりて既小のあろゆる俱當
 城に留置て扶持と老を願せん西二日疲労もあるべし權且照文小預け置入宿所伴ひ
 勤りて異日見参小入れよかととと懇切小宣ひて休息の暇とあり稲村よりあつせられ
 たる使者の件の下と示し文五兵衛妙真們を宣く扶持しめんと義成小喜んて

として隨便還一あけりその後文五兵衛妙真の義実朝臣小見参と懇切も仰を蒙
 又稲村の當主義成朝臣も當城の有司小命とて他們が宿所を修理せぬ婢さ
 隷て不自由も恩賜那身小餘るるその支の趣の載て第四十四回小具されり
 中を都て畧記さる看官前後と照し七知るべし徳而の年十載の秋有一日稲村より義
 成の隴田の城へ來ませ折照文並小文五兵衛と妙真と召出七尉めぬと大さるる東
 西とて賜りければ義実老侯被ひぬる義成主と商量ありすふ那大塚信乃大
 飼現八犬小文吾們が外小犬川額藏と喚做きありそそ那明王八顆の内中義
 字あると所持をれば大江親兵衛と共小五名必宿因あると思ふなりてそそ又か
 り小実小その母と玉の數小相稱ひて必八人あらん各仁義八行の徳と天地小稟
 果の具足其相伴ふてもあつてとて推辞もせずしれ招まとも時至る必當家

股肱とまん天縁をくわあふん思へる大塚信乃の行徳を窮泥あり幸いふと山
林房八が身と殺して救ひ給ふるといふ事かとも又那大江親兵衛の神隠の憂ひありそれ
のるる文五兵衛が傳書の説きも那大川額藏と挨拶做すの至実の罪を寛けら
るゝ大塚を大石憲重の獄舎に在るを刑罰の場へ信乃現八小文吾が謀と
すくとり追隊の士卒が趕逼られて皆殺し捕られりともいふ免れらるといふありと
救ひ合ふと追隊の士卒が趕逼られて皆殺し捕られりともいふ免れらるといふありと
存亡安定するべとて其の虎在実の知らぬもその後又他們が上ふ急難あふ争何のせん曾
安らぬのるる復十一郎照文の究竟の夥兵五七名を従へて重て他們が往方を去
後て再會せむ將て来づく倘又固辭して従へず他們と俱に餘の犬士も去巡りて非常準備
へ路費の資助の事あるに後路次で殊危あるも防ぐ便宜あるべし其身隱遁
せり日よ政事のゆゑ世の好歹と見えとと思ひかゝる伏姫が終に臨みとていふと
咄合して現奇に出世の犬士們的に執外標の心地をされりといふ事とせむとて
和殿の意見

甚麽ぞと問れて義成異議あるを仰定ふその理あり恐れざる見分思ふ所も御意の如
ま然と又照文はその義を命じゆんとも兩侯の身邊近しく照文を召よせ義成みづろ
箇様々と件の吉支の趣を町寧めあらるゝて帰國の後程も投て去向も安定する
犬士們を去るに遺すの心あるに似れども照文を去るに別人のよき去るにあはれれば已とて
義成及ぶ準備せよとのそが義成實も亦云と示さるる親心命あり照文を去るを
毫も礙議の氣色なく最正首尉に稟し自ら起りゆんとも遠く退り出
か義成の有司命とて照文を従へる夥兵七名を擇よせ路費並に犬士們的賜ふ
べし金子も照文を遣とせよのひけり小程に文五兵衛と妙真のよを傳義成を飽ませ
賢と愛し士と徴めぬの兩侯の恩と感と相救ひて俱におも願いかども義成固く禁
めさせ恩命の懇切を徒而發崎照文の件を夥兵們を従へて又八州を徧歴の首
途を考らるる年の
十二年春二月十五日小文五兵衛の身故けり是より後照文が

信久く望えざりし所既ふて四稔ふり。文明十五年辛丑の冬十月下旬小幡登崎十一郎照文の甲斐の石木より来る。那大士們を伴ねども十稔あきの前つ比就鳥居捉られぬ。たる義成の息女濱路姫と伴ひあむせし。と望えし。稲村瀧田の両侯より諸臣女房に至るまで世の多た人の眞土より来るませし心地を去れん哀歡交判くよむる祝壽の聲みみり。耳に盈ち介程の両侯の義成の昭文が許の趣と听ぬ。昭文の近比甲斐の石木の旅宿せし。折、大法師は再會れ度之趣又大山道節が犬塚信乃の再厄と極ふ及びて憶りく濱路姫の素生とぞ知ることを。大法師の住持等指月院へ俱しあむせし。その支の始る所。及木工作が枉死の事。並ふその妻夏引が甲斐の國司武田信昌の家臣泡雪奈四郎夏引と女通の事。濱路姫と犬塚信乃と謀り。その妻の終るまで昭文が直置。処具るをよとせし。有徳奈四郎夏引の奸悪竟る發覺れて夏引並ふ奈四郎が

悪僕恂内の首と列られ奈四郎は又一個の悪僕媪内を俱して逐電ある比信昌の主放。雁鳥のかへさし指月院に立よとて、大法師は對面あり。折信乃と道節も見参入り。その智勇と賞美のあまの留めて高祿と合せんと。親命大々する。信乃道節は推。辞まうして當坐の徴めを免れれども那里不在。城内へ招くことあり。大法師は別を。告て猛可指月院と立去。折照文も他們と共に濱路姫を守りて。悄々地内歸國。及ぶ程小武藏の四家の原で那泡雪奈四郎を犬塚信乃が敷を捕て姫上の如く。木。工作の怨を雪め俱して黒墨田の頭を求ふけり。他們は同因果の犬士大川額藏の莊。介大田小文吾大飼現八人の環り會ひ。折共侶あむせし。今番も推辭まう。去不。恩賜の金子と信乃道節は遞与して後會を契り。その意不儘たり。又那大。山道節も忠字の明玉と感得あるのふして。煉馬の老當黨大山道策が家子である。佐々大士六名の既相識るを。よとて。隸させし。影兵兩三名と石木を留めて

後便の與ふ俱せ。其餘の都て姫上の元轎子と昇せり。又原の姫上の養父四六城木
工作の大塚信乃小借縁。那身の奈四郎不敷れ。武田殿より迹を立られを親族の
子と木子作が死後の養嗣せしむるより。既の風聲あり。姫上不思議の年来之歷
あり。八値遇の縁あり。木工作が実不慈善の致す所。今番帰國の元始に道節信乃
と。大法師の帮助あり。もとて。這餘の箇様々々。道節信乃其小文吾現八の
五犬士が荒芽山にて射死の。姥雪と四郎音音の。子十條力二郎尺八の。其妻
曳子一節の。忠死義没の顛末を。所隨子夢え。證據の與不察。姫當
初被させ。藤龍胆の御花。薙ち衣と大塚信乃が敷捕。寛家泡雪奈四郎
の首級を實檢入れ。義実主も義成主も只顧。奇の驚。感悅淺
か。況姫上の父母胞兄弟連の。誠の辟言。物々。躬て對面。濱路姫と
民間の人と成り。進止。容止。亦美。姉君妹君達。優る。安

て。おのれと。二親の鍾愛。特さ。多。款待。あ。照文の功を
褒め。且件の野兵。賞禄。信乃。六犬士の外。二器具。足せ。招
む。必。他。當家の與不忠。功。宜。稀有の奇。去。母
の。思。義。如。義。一。見。思。召
せ。切。昔。濱路姫の。就。折給事の男女。名。行。心。ら。
身の暇。姫上の菩提。與不祝。僧と。尼。月。奉。を
賜。那四六城木。富山の。大。追。佛。事。件の
寺。其。建。祠。堂。料。寄。附。善。必。善。報。悪。必。惡。報。今。の
て。明。君。の。善。政。漏。ら。不。限。枯。骨。及。不。約。莫。這。回。鮮。處。
第五輯四十回より第七輯七十二回に至るまで。寫着。官。兼。知。の。今
又。安。房。の。及。て。再。せ。る。故。初。の。略。せ。不。具。考。る。初。具。不。寫。せ

去の茲不思客せむもヨリ。看官知まらるればとて。那大士門の顛末と里見殿父子知の事
 此是より後不便作者の用意と思惟るべし。問話除般系徳而る次の年。文明十冬十
 二月の某の日の御不登崎照文が甲斐の石木の指月院に留り置置る。夥兵們がかつて
 大法師の消息を照文に遞与し。且武藏の穂北より。水垣夏仍許寓居せる大塚信乃
 大山道公即口狀を演傳下し。照文いさるるを以て。大の書翰を閑する。犬川莊介の犬
 田小文吾と伴て。日指月院に來り。同因果の一大士大坂毛野智の往方と
 る得も素んと。俱の信濃路に赴行。并子犬飼現八。又是同因果の一大士大村大角礼儀
 との。日武藏の穂北より。指月院に來り。止宿の。又信乃道公の穂北の郷士水垣夏仍の
 留りて。權且那里に寓居する。又毛野が石濱の復讐言大角が壁返の妖怪對治。又小文
 吾が越後中。暴牛と推駐り。竝に賊婦船虫の。折子莊介が強盜酒顛二門を
 誅戮の。并小長尾景春の奶々箆の天刀。自の臣稲戸由元の。小千谷の使者石龜

屋次園太の。山崖略と寫自て。件の毛野の素生。感得考。智守の
 玉あり。又大角の出處。任々。ある礼字の玉と持り。那身の内。瘧あり。形狀牡丹似。と八
 人。都て異なる。但る有る。処同。か。玉の數。稱ひ。大士八人具足。せり。中
 親兵衛の存亡。し。知る。由。毛野が往方。詳る。彼。その人。あり。そ。人。足。り。ね。と。天機。を
 破く。團圓。其。全。取。水。え。と。遠。く。あ。べ。く。は。拙。僧。本。院。住。持。の。実。已。こ。る。所。初。素
 より。久。恋。の。地。あ。る。故。の。來。ん。春。の。本。院。と。辭。去。て。下。野。州。結。城。小。赴。死。姑。且。那。地。小
 庵。と。締。び。て。先。君。賢。本。基。竝。不。吉。姑。吉。不。陣。殺。の。諸。灵。魂。の。甘。菩。提。の。與。大。念。佛。を。修
 行。す。結。願。は。ま。下。年。の。四。月。十。六。日。の。幸。い。あ。る。時。候。ま。大。士。們。一。緒。の。聚。り。て
 八人具足。する。と。あ。る。俱。と。故。御。ま。か。る。ま。く。欲。き。是。是。の。う。と。兩。殿。小。宣。示。と。あ。る。照
 文。斜。る。を。欽。び。て。次。の。日。先。の。狀。と。義。実。朝。臣。の。披。露。し。て。よ。し。と。少。え。あ。は。れ。義。実。感。悦。の。事
 べ。う。も。あ。る。件。の。書。翰。と。合。抗。て。繰。返。々。々。閑。し。ぬ。と。半。晌。許。讀。果。て。宣。示。す。喜。嘉。吉。小。結

城落城して先君戦殺させし。今に至りて四十二年。我一日も忘れし。こゝに那里へお墓
碑と建まけり。思ひかへし。その間敵地あり。人馬の通達自由なれど。且京都將軍へ
憚りよ。ゆるがれぬ。ね。思ひかへし。その間。親の神を慰むる。と。あ。て。過せし。今。番
大が。我。願。ひ。我。代。も。考。順。の。誠。心。で。と。有。り。け。れ。且。那。八。箇。の。火。玉。の。往。方。を。竟。し。索。知
て。その。王。も。因。て。生。出。す。大。吉。數。も。亦。八。八。の。三。人。を。の。こ。と。し。入。り。と。知。る。と。の。獨。大。功
徳。小。よ。り。壁。言。千。體。の。僧。と。為。り。七。堂。伽。藍。と。建。立。の。開。山。の。祖。師。小。ん。よ。り。の。と。故。に。こ
所。行。す。ま。は。但。心。も。あ。ら。ぬ。明。年。四。月。の。中。氣。ま。た。小。大。江。親。兵。衛。大。阪。毛。野。が。往。方。を。知。る
よ。あ。ら。ぬ。毛。野。も。出。て。來。ぬ。せん。那。親。兵。衛。四。歳。の。時。神。隱。小。遇。ひ。と。傳。け。た。既。に。五。松。の
光。陰。を。經。り。尚。存。命。が。明。年。九。才。小。の。を。ら。ぬ。是。是。等。の。よ。り。妙。真。小。傳。知。し。と。慰。む。明
年。の。四。月。に。結。城。我。代。香。小。照。文。を。遣。さ。し。る。不。程。あ。る。と。小。稻。村。へ。照。文。ま。あ。り。て。大。が
書。翰。と。披。露。し。ね。義。成。の。さ。を。本。意。と。し。め。よ。の。の。の。箇。様。と。と。叮。寧。小。命。に。あ。り。更。小

又。有。司。命。と。今。番。甲。斐。よ。り。の。香。小。照。文。が。親。兵。衛。小。東。西。と。賜。ふ。と。初。の。ど。君。恩。微
賤。も。漏。れ。ま。た。也。傳。へ。し。の。め。の。の。と。辱。く。思。ひ。け。り。話。分。兩。頭。這。年。上。總。州。夷。瀆。郡。館
山の。城。主。小。甚。田。權。頭。素。藤。と。喚。做。け。ぬ。の。の。を。素。生。と。原。る。小。親。近。江。の。膽。吹。山。も。は。強
人の。頭。領。も。但。鳥。跡。六。葉。因。と。喚。れる。殘。忍。鶴。島。の。暴。雄。武。藝。雲。割。姚。穿。穴。命。の。御。ま。で
素。も。得。る。所。も。往。る。正。長。永。亨。よ。り。嘉。吉。の。年。小。至。る。ま。で。京。鎌。倉。小。共。乱。絶。え。毛。足
利。の。武。威。衰。へ。諸。侯。割。居。の。折。れ。の。葉。因。類。と。て。聚。合。小。嘍。囉。々。ある。膽。吹。山。小。躰
住。て。折。々。畿。内。へ。横。切。れ。れ。も。その。出。没。小。入。知。せ。ぬ。或。は。小。寺。院。を。脅。す。又。ある。時。小。家。民。を
殘。害。し。て。其。財。を。奪。ふ。と。幾。千。百。も。知。り。と。し。て。海。雲。の。富。も。至。る。葉。因。が。慓。慢。の。よ
へ。も。あ。ら。ぬ。一。碗。の。美。酒。の。與。小。海。錯。野。味。列。ね。て。尚。飽。ぎ。と。の。思。ひ。因。て。其。惡。黨。の。狡。然
りの。甘。唐。の。入。る。胎。内。の。赤。子。と。言。ひ。酒。の。餚。小。做。さ。し。味。を。量。り。大。當。り。と。哄。誘。せ
ま。ふ。葉。因。を。ち。所。て。素。殘。刀。心。の。癖。を。れ。然。る。と。あ。ら。ん。と。思。ふ。小。嘍。囉。小。吩。听。て。孕。子。は

婦と奪會し生さるる腹と裂れ七胎の子と蒸て啖ひ炙り由きて酒菜おせし味は口小稱いければ是よりと民間の懐胎の婦と索ひて掠奪を殺する那唐山の盜路が凶暴の中過されし這事竟お世まで膽吹山の鬼路六と人々他を怖るる疫鬼お異るる積悪の報ひりける有年の六月中流小業因の京師る祇園會を初めとして事熟る小嘍囉三四名と從へて各々形體と変え深草園扇をどと賣る小經紀兒お打扮て神會の本日京小赴け人家の簷下小立在る種々の山鉾の渡ると親々ありける小怪び業因が肚裏お聲あてて忽然と叫ぶ心聲東東異るる年来他が做き悪きを云云と暗る聲耳高ふて人の耳串く可おけさる業因が驚馬慌て腹を厭干會を拊く禁んと欲されども高く罵りて毫も寝とるる小嘍囉們も驚呆れて傍痛く思ふ今ゆくせん御ぞ知ぞ況る間近く聚合る衆人の送袖と掖目を注して怪と怖れるもの浩処お室町家の市正高梨六郎左衛門尉職徳と喚做を武士あり緝捕使矣

將を這日祇園會お衆人取都合市中の非常と教言んと夥兵五六百名と從へて騎馬苛めく巡麻生叱咤の聲も暴々お巷路を斬人お竹筒杖と引鳴き先を拂と求ふれば業因竝小嘍囉們の齊一慌忙に快躰んと欲されども惘然とて錐も治立ま人の山做を人お堰れ進退便りおさるる業因が腹内をその積悪と罵るる正這時殊お甚多く隱まざるもあざざりし職徳を奪これを取着且怪るその人哉相るお形貌の經紀兒お似れどもその面魂極極見れり腹内お聲あてて或る姓名と告る或る積悪と罵る正の分明なれば原來那奴の豫め強盗但鳥路をらん兵毎逃さる捕捕りねと馬上お劇し下知お從ふ搦雄の夥兵數十名乗りぬと志お果せお生轉々と捕綱て脚錠と喚擻々々三七二一小競ひ鬼れる勢お免るるもあされば業因の吐嗟とをら小殺脱んと欲されども身お寸鐵と帶されば經紀人の店前おは木お絶の小杉木と引被持く當るお儘と搏おせし勢お物もせ前後左右



八天傳九耳卷三

共

女奚堂上殿

高梨職徳市
但鳥業因と捕捕ふ



八天傳九耳卷三

女奚堂上殿

〇〇〇

折累り。矢場小組住り探伏せし押へて索を楯小けり然此業因小従ひ来る。西個の
小嘍囉們も。折三人の搦捕られ辛くも逃亡せり。只一人とすえけり是業因の
恩闘中。群集の男女迷ひ滾びて入小踏々あり婦幼の泣叫び。只蟻の子と散まが如
く走る迹へ又聚合。鄙語小怖。物欲見る人心老弱男女賢不肖是より
後日と歷るまで。這強人の噂との。いも継記傳も傳へ。奇談るを。唐山の
戦國の時好て人肉を啖ひ。めある我神州の往古より。残忍慘毒の猛者。とを牛
馬の肉ま。啖ふも稀る。介る。但鳥業因。及婦の胎と。奪て。小兒と啖ひ
ま。所云。入面獸腹。その惡虎狼。勝り。天罰人怨。其報。以て。忽地。腹内。小聲
あり。その積惡と。訴。緝捕の繩。小敷。系れり。怕。誠む。と。取。見。人。と。あり。けり。
畢竟業因が。捕捕。られて。後の。話。説。甚。麼。を。必。そ。次。の。卷。小。解。分。る。と。聽。ね。か。し。

南總里見八犬傳第九輯卷之三終

